

幼稚園における未就園2歳児を対象にした子育て支援に関する一考察

A study on the child caring support for 2 year-old prenursery school children at the kindergarden

青木好代* (平成24年2月14日受理)

要約

幼稚園において行われている未就園児親子登園は、今日、親子が安心して集える場として多くの園で実践されており、その有効性も示唆されているところである。本研究では幼稚園での未就園児親子支援を取り上げ、幼稚園就園前の2歳児親子登園に着目し、幼稚園が担う子育て支援としての2歳児保育の意味やその在り方を教師の記述を手掛かりとして考察していく。

キーワード：幼稚園、子育て支援、2歳児

keywords : kindergarden, child caring support, 2 year-old children

1. はじめに

近年、社会の中で子育て家庭を支えていくシステムが構築されてきた。その背景には、核家族化や少子化、女性の社会進出の増大等により、家族の機能、家族の在り方が大きく変化してきたことが影響していると考えられている。核家族の進行や地域の希薄さは、子育てを困難と感じる養育者をより増加させることになり、特に家庭で子どもを育てる専業主婦に育児不安がより高いことが示されている。

こうした社会状況に対応していくために国はこれまで様々な方策を打ち出してきた。

幼児教育の分野においては2001年に「幼児教育振興プログラム」がまとめられている。その活動の中に「未就園児の親子登園、園庭開放、園舎の開放」が明記されたことにより、子育て支援の一環として多くの幼稚園では未就園児の親子登園が行われるようになってきている。その実態をベネッセ次世代育成研究所(2007)のデータで見ると、幼稚園における未就園児の親子登園は、0～2歳児では、国公立の40.6%、私立の59.7%となっており、3歳児では、国公立の52.4%、私立の63.2%と過半数の幼稚園で実施されている。さらに、幼稚園への積極的な受け入れ、すなわち「2歳児

保育」を行っている幼稚園も多く見られるようになってきた。これもデータで見ると、国公立は0.7%と低いですが、私立では26.4%となっており、その71.9%が「平日に毎日」行われている。その体制としては、受け入れている園の57.7%に「2歳児だけの学級」があり、24.9%が「3歳児学級」に入っている。こうした幼稚園での2歳児保育の広がりを見据えて、2007年文部科学省初等中等局幼児教育課(2007)から「幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受け入れに係る留意点」が提示された。その基本的な考え方は1)大人への依存度が高い2歳児について、幼稚園児としての集団的な教育を行うのではなく、幼稚園内の人的・物的環境を適切に活用し、個別のかかわりに重点を置いた子育て支援として受け入れる際には、幼児に主体的な活動を前提として行われる満3歳児以上の幼児を対象とする幼稚園教育をはめていくのではなく、2歳児特有の発達を踏まえた受け入れに配慮し、その成果を3歳児以降の幼稚園教育につなげていくことが大切である。2)幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受け入れについては、保育所とは異なり、幼児教育への円滑な接続の観点から行うものである。2歳児の発達を踏まえ、その基本的な考え方については、次

(*あおきたかよ 保育科兼任講師 保育内容言語)

の通りである。①2歳児の受け入れに従事する者は、幼児と一対一の関係を大切に信頼関係を築き、幼児が安心して自分の気持ちを表したり、自分の思いで行動したりするように援助することが大切である。②幼児一人一人が、食事、排泄、衣服の着替えなどの健康で清潔な生活の習慣を身に付け、自立しようとする意欲を持つようにすることが大切である。2歳児の受け入れに従事する者は、幼児の世界を広げていくようにすることが大切である。③2歳児の動き方や遊び方を踏まえ、健康や安全に十分に配慮した園舎内外の環境を整備することが大切である。④親子で一緒に活動したりして、保護者が子育ての喜びや楽しみを味わう機会を作りながら親として成長できる場を提供していくようにすることが大切である。以上のように、幼稚園で子育て支援の一環として実践していくことを前提として、2歳児の受け入れについて述べられている。

子育て支援の一環として2歳児を積極的に受け入れている幼稚園では、現在入園までに本来経験してきてほしいことが未経験のまま集団生活に入ってくる子どもが増えており、そうした子どもたちを見ていると幼稚園入園がスタートではなくそれ以前の生活の様子や子育ての考え方を知ることが重要だと感じられる。その上で、これからの幼稚園教育を充実していくためには、幼稚園入園前の2歳児からの連続した発達を探り、3歳からの幼稚園教育に活かしていく必要があるのではないだろうか。

しかし、幼稚園にとって2歳という年齢は未経験の領域であり、保育技術を持たない分野である。今まで幼稚園では自立や自律が芽生え、集団という人と人のかかわりの中で生活し、教育を受けることが可能な3歳以上の子どもたちを扱っている。ところが2歳はそれ以前である。自立と甘えの間を激しく揺れ動く2歳児の育ちは家族に見守られ、温かい安全な家庭という小さな集団で育つことに意義があり、家庭は来たるべき外の集団社会への備えを学ぶ場である。そこで、従来の3歳以上の集団生活というイメージを取り払い、じっくり自分のしたい活動を楽しませるといった2歳児

としての保育展開を具体的に進め、その生活と育ちの意味や支え合えるところはどこにあるのか考えていかなければならない。

義務ではないが2歳から6歳までの子どもすべてが無料で幼稚園への入園が可能であり、学校教育の最初の段階に組み込まれているフランスの幼児教育についてザゾ(1989)は2歳半という年齢は集団生活が可能で最低年齢であり、十分な条件を整えているならば、幼児の発達にとってむしろ自然な環境を補い形づくるものであるとしている。しかし、「就園」の是非については判断を保留している。

今日、幼稚園という教育機関の中で様々な形態で2歳児保育をしている園が増えている実態にある。

本研究では、筆者が勤務する幼稚園の子育て支援の一環である2歳児親子登園クラスに焦点を当て、2歳児クラスに在園して3歳児就園した子ども、及び2歳児クラスに在園せずに3歳児就園した子どもを対象に、子どもの姿を教師の行動記録を通して明らかにし、幼稚園で行う2歳児保育の意味やその在り方を考察していく。

2. 2歳児クラスの概要

【2歳児クラス】満3歳の誕生日を過ぎ3歳になった子どもとまだ3歳の誕生日を迎えていない2歳の子どものクラスを指す。

【登園日】週2回(火・木)を登園日とし年間保育日数は90日程度である。

【保育形態】子育て支援の一環として、未就園児の2歳児を対象に2歳児クラスとして次のような実践をしている。

- ①1学期は親子一緒に登園して一緒に活動する親子登園とし、保育時間は9:30~12:00としている。
- ②2学期は可能な子どもから一人で登園して園で過ごすことを前提にして、保護者には迎えの際に園庭遊びに加わってもらい、子どもの様子について教師と話し合う時間を設けている。
- ③3学期は週2回の内1回はお弁当日とし、保育時間は9:30~13:00としている。

- ④定員は10組の親子としている。
- ⑤教師は1名が担当し、一人登園となる2学期から補助教師1名が加わる。

【保育内容】 ねらい

- 1学期……親子で色々な遊びに興味を持ち自分から好きな遊びをみつけて喜んで遊ぶ。
- 2学期……お母さんに手伝ってもらいながらも、身の回りのことはできるだけ自分でしようとする。
- 3学期……友だちと遊びの中で、言葉を交わしたり、関わりを持って遊んだり楽しく生活する。

【日課】

(1学期・2学期)	
9:30	登園 身支度(母と一緒に) 室内遊び
10:30	お片付け おやつ(主に果物・小魚) 設定保育(手遊び・歌・絵本・わらべ歌) 降園準備
11:20	外遊び(母と一緒に)
12:00	各自降園

3学期は週一回お弁当日で、降園が13:00となる

【主な活動】

1学期	親子一緒に楽しめるプログラムを用意
	・室内遊び……積み木、机上遊び、お絵かき 絵本、わらべ歌
	・体育遊び……マット、巧技台、鉄棒、平均台 ボール
	・外遊び……砂場、固定遊具
	・水遊び……プール、アクアプレイ
2学期	一人一人が主体的に遊べるように室内環境を設定
3学期	みんなで一緒に楽しめる遊びを取り入れる。二人で楽しむわらべ歌やリズム遊びを取り入れる。時々3歳児クラスへ参加する

【幼稚園行事への参加】

- ・講演会、フェスティバル、コンサート、クリスマス礼拝、お楽しみ会など

【家庭との連携】

- ・送迎時、外遊び時
- ・毎月、クラス通信を作成し、月のねらいや主な活動(キリスト教保育に基づいて)、子どもたちの様子を記載して発行
- ・誕生日会は保護者に簡単な調理をお願いし、皆で祝い会食する。

上述のような2歳児クラスに在園することは2歳児の成長にとってどのような意味を持つものであるのか。また、その在り方を2歳児クラス在園児と2歳児クラスに在園しないで就園した子どもの行動記録を比較しながら考察していく。

3. 方法

(1) 調査対象

2006年度と2007年度に愛の光幼稚園の2歳児クラスに在園し、同園の3歳児クラスに就園した子ども(以下、2歳児就園児)17名、及び2歳児クラスに在園しないで2007年度と2008年度に3歳児就園した子ども(以下、3歳児就園児)27名(双子が1組在園)を対象とした。また、2009年度に愛の光幼稚園2歳児クラスに在園し、2010年度に3歳児クラスに就園した子ども8名、及び2歳児クラスに在園しないで3歳児就園した子ども9名を対象とした。

(2) 調査手続き

2006年度と2007年度の2歳児クラスにおける2歳児就園児の行動記録及び2007年度と2008年度の3歳児就園児の行動記録を担当教師の日課から取り出した。なお、個人が特定できる記録のみを取り上げている。その他、途中入園した子どもの記録は取り上げていない。また、2010年度に3歳児就園した子どもの行動記録(週案)については、個人記録(週案である為に)を取り出すことが困難なために教師への聞き取り調査をしている。

(3) 行動記録の対象とした子どもの内訳

表1) 2歳児クラス在園児とその後3歳児就園した子ども

	2歳児クラス在園児数	3歳への就園児数	他園へ就園した子供	就園しなかった子供
2006年	11人	9人	1人	1人
2007年	8人	8人	0	0
2009年	13人	8人	2人	3人

表2) 3歳児から就園した子ども

年度	3歳児就園児
2007年度	14人
2008年度	13人
2010年度	9人

4. 結果と考察

2歳児就園児の行動記録（2歳児クラス在園時と3歳児クラス就園時の行動記録）及び3歳児就園時の行動記録を「母子分離」「教師との関係」「排泄の自立」「遊び」「友だち関係」と5つの側面に分けて考察を試みた。ここでは、「母子分離」を一人で幼稚園に登園することとして捉え、「排泄の自立」はトイレで用が足せることとして捉えている。「遊び」は子どもの姿から表現や行動を通して環境への積極的な関わりとして捉え、「友だち関係」は言動や行動を通してクラスで一緒に過ごす子どもたちと関わっていく姿から捉えている。それらを分析して幼稚園が担う子育て支援としての2歳児保育の意味やその在り方を考察していく。

(1) 母子分離

母子分離とは、「お母さんの姿が見えなくても、強い不安をもたずに遊んでいることができる。あるいは、友だちと一緒に、ときには一人で、戸外に出かけて行って遊んでこられること」と依田(1979)は述べている。ここでは「母子分離」という言葉を依田が述べていることも含めて、園児が一人で幼稚園に登園することを意味するものと

して使っている。2歳児就園児は定期的に登園することにより幼稚園の環境や生活に慣れ親しんでいた。また、親自身も親子登園時に幼稚園の様子がわかり、幼稚園に対する安心感と信頼感が芽生えており、就園への不安が軽減されていたと思われる。その結果、3歳児就園時に母子分離が容易になり、就園が円滑であったと捉えることができた。教師の日課記録からも2歳児就園児は3歳児就園当初に「元気に登園」との記録が約8割の子どもに伺えた。しかし3歳就児就園児の日課記録には「表情が硬く笑顔がない」等、ほぼ6割の子どもが入園当初に困難な姿が伺える結果であった。

(2) 教師との関係

「集団の中で自分の立場を得ていく場合、普通子どもたちは、大人との関係ができて、安心感が持てるようになってから、個々の子どもたちとの関係が進展していく」とリード(1978)が述べているように、教師との関係が出来上がることは、子どもたちが集団での自分の立場を一步一步得ていくための第1段階として、とても重要な役割を担っていると言える。

2歳児就園児は在園中に教師は自分に対して親愛的であることを体得しており、その経験から3歳児就園時にも容易に教師を受け入れることができた。また3歳児クラスの担任も昨年度の登園時に子どもたちを少なからず把握していた。こうしたことが相乗効果となり2歳児就園児が短期間に教師との信頼関係が構築され、就園間もない時期から担任教師に対し素直な自己表現をしていたと思われる。教師の日課記録にも「保育者へ自分の方からおしゃべりをしてくる」や「友だちと先生ごっこを盛んにする反面、反抗的な態度も目立つ」等に教師に対して積極的に関わろうとする姿や3歳児らしい自己表現から教師に対する信頼感が伺えた。中には「担任とのかかわりが少ないと不安になる」と進級したことで不安になる子どもの姿も見られている。一方3歳児就園児は「保育者にスキンシップを求め、手をつないだり、抱っこしてもらったり、一緒に遊ぶことを好む」や「自分の思いを伝えられず、我慢する姿が見られたが、

声かけをしていく中で、次第に自分の思いを伝えることができる」等と入園当初、教師を受け入れ、信頼関係が構築されるまでに約7割の子どもたちに困難な姿が見られた。このような「教師との関係」の日課記録は2歳児就園児が13.3%、3歳児就園児は35%であり、3歳児のクラス担任は3歳児就園児に対しより心を配っていたことも伺える。子どもたちが教師に対して心を開くまでには多少の時間を要する結果であった。

(3) 排泄の自立

乳幼児期の子どもにとって、トイレトレーニングが完了できたということは自立への第一歩として捉えることができる。しかし、子どもにとって、決められた場所で自分の意思で排泄できるようになるということは、おむつの中に排泄するという、慣れ親しんだ古い習慣をすてて、新しい行動の仕方を学習しなければならないために、なかなか困難なことである。エリクソン(1977)は「コントロールに失敗したときには、子どもは自分の能力や存在価値に対して疑惑の念を抱いてしまう」と述べており、幼児前期における排泄のしつけは重要な課題であり、特に配慮が必要と思われる。

「排泄の自立」は、入園間もない時期から援助が行われ、担任教師にとってはこうした行為を通して、子どもの状態や体のリズムを掴むことができる。また、子どもへの配慮の積み重ねが子どもとのよい関係を作り、子ども自身も排泄の自立が促されると考えられる。しかし、自立していても、またある時期、再び失敗があることもみられており、排泄の自立には心的要因が関わっていることも伺えた。2歳児就園児は2歳児クラス在園中の3学期には、ほぼ全員が自立できていたという結果を得ており、3歳児就園児についても1学期の間にはほぼ全員が自立できていたことから、集団生活を通して排泄の自立は促されることが示唆された。

(4) 遊び

子どもが「遊ぶ」ことは、幼児期における仕事であり、好ましい環境にいる健康な子どもは、自

分が起きている時間のほとんどを遊びに費やしており、子どもの遊ぶ姿は当然のこととして捉えることができる。ところが、幼い子どもたちがその環境に馴染み、受け入れ、楽しく遊び始めるには時間を要する結果が得られた。

2歳児就園児は2歳児在園中にその土台ができていたと考えられ、3歳児就園当初から積極的に遊ぶ姿が9割の子どもたちに見られている。ところが3歳児就園児は、「いろいろな遊びに興味を示すが、ひとつの遊びが長く続かない」と初めての環境に戸惑いや興奮の中で遊びをじっくり楽しめずにうろうろする姿や「常に遊びたい思いが優先し、遊ぶことで頭がいっぱいで、他のことは気がそれてしまう」等の日課記録がみられた。3歳児就園児の約4割に当初から積極的に遊ぶ姿が見られているが、2歳児就園児と比べると低いものであった。

(5) 友だち関係

遊びを介して始まる「友だち関係」についても同じクラスにいる子どもたちを仲間として受け入れ、共に遊ぶまでには時間を要することが示された。友だちと一緒に遊びたい気持ちに反して自己中心的な振る舞いをしてしまう2歳児にとっては、さまざまな体験を通し葛藤を繰り返しながら自己抑制力やコミュニケーション力が育まれていくと考えられるが、そこには傍にいる母親や教師の適切な援助を要すると思われる。1年を通してこうした体験をしている2歳児就園児が3歳児就園時には、「毎回好きな友だちと一緒に座りたがるのでトラブル発生」や「自我が強くと口げんかが絶えない」等、友だちと関わる中で否定的な日課記録が約3割に見られた。一方3歳児就園児においては、「自分が気に入らないと、泣いたり相手をぶったり、かむことがある」や「遊びの中で、自分の思い通りにいかなかったり、嫌なことがあると一人で隅の方に座る」等、初めて経験する集団生活での否定的な日課記録が6割に見られている。

肯定的なものでは、2歳児就園児には「自分をおねえちゃんと呼び、3歳児就園児の面倒をよく

見る」や「持ち前の明るさと、優しさで皆から好かれている」等、慣れない新入園児に優しく接したり、明るく振る舞ったり、面倒を見ていることが読み取れた。また、3歳児就園児においても、「社交的で自分から友だちに話しかけることができる」や「不安定になっている友だちがいるとすぐに寄っていき、声をかけたり優しく気遣う姿が見られる」とした日課記録が見られている。しかし、1年早く集団生活を経験することは、子ども間の関係が頻度や持続時間においても増加し、また、コミュニケーションも増し遊びや活動が変わってくるのが示唆された。

5. まとめと課題

今日、以前のように自然な生活のなかで育まれていた社会性の発達、集団生活の場において培われることになると考えられ、現在社会の中で育つ子どもたちにとって未就園児親子登園は大切な機会として捉えることができる。さらに2歳児が集団として定期的に登園することは、比較的短期間の間に新しい環境に慣れ、親しみを持って言葉を交わしたり、喜んで遊びに取り組む姿がみられ、継続して登園することで仲間として良好な効果が生じていたと思われる。

就園前に1年早く幼稚園の「2歳児クラス」へ通園することは集団生活を通してさまざまな体験や葛藤を繰り返しながら、子どもの成長が助長される結果が得られた。その上、幼稚園生活への移行が円滑であったとその有効性が得られた。

一方、こうした子どもたちを受け入れる保育現場では、家庭での子育ての困難さに伴い以前のような保育が成り立たなくなっている現実も見逃せない。その背景として家庭の養育の中身が大きく変化した結果、その生活に難しさを抱えるようになってきていることが考えられる。鯨岡(2001)は「一昔前なら、そこにはかなり共通する姿があり『人さまの迷惑にならないように』といった配慮がどの保護者にもおのずから働き、それが家庭での子育てを平均化するのに役立ち、巡り巡っては、保育の土台を形づくるのに一役買っていた」と捉えている。

これからの幼稚園教育の在り方を考える時、幼稚園は3歳が集団生活のスタートであるが、それ以前の生活や子育ての考え方をすることが重要であり、3歳からの教育を捉えている幼稚園は、こうした背景を熟知し今後の課題として考えていかなければならない。

近年、家庭が抱えている子育ての困難さを思う時、集団社会への第一歩を踏み出そうとする3歳児やまたその母親にとっては、緩やかな助走期間が必要ではないだろうか。就労支援ではなく、自分の手で我が子を育てたいという気持ちを持っている保護者に寄り添った支援がより充実していかなければならない。母親を子育てから完全に解放する時間の手助けをするのではなく、これから成長していく我が子と共に成長し、喜びを分かち合い、家庭での親子関係や親子の絆を築きあげる手助けとなる家庭支援への充実が今後、幼稚園が担う子育て支援の課題ではないかと考える。

〈参考文献〉

1. 文部科学省 幼稚園を活用した子育て支援としての2歳児の受け入れに係る留意点(2007)
2. 青柳 宏(2007)自我とかかわりを育む 宇都宮大学 幼稚園研究紀要51
3. 伊東明彦, 高柳恭子, 岩渕千鶴子, 五十嵐一郎, 前原由紀, 稲川知美, 星野さやか(2008)今求められる幼稚園像 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要31
4. K.H.リード 宮本美沙子, 落合孝子訳(1978)幼稚園 フレーベル館
5. 無藤 隆, 今井和子(2007)幼稚園の2歳児保育と子育て支援 小学館
6. 佐々木 和, 佐藤正枝, 畑山みさ子(2006)幼稚園が担う子育て支援方策の検討(6) 宮城学院女子大学発達科学研究6
7. ベネッセ次世代育成研究所(2007)幼稚園における子育て支援の実施 第1回幼児教育・保育についての基礎調査(幼稚園編)
8. 依田 明(1980)3歳児 朱鷺書房
9. ビアンカ・ザゾ 久保田正人, 高橋洋子 足立二郎訳(1989)2歳児の幼稚園教育は是か非

か 大槻書房

10. E.H.エリクソン 仁科弥生訳（1977）幼児
期と社会 みすず書房
11. 鯨岡 峻, 鯨岡和子（2001）保育を支える発
達心理学 ミネルヴァ書房